

知る事が…忘れない事に

「福島原発事故」の活字が新聞の1面トップ記事になった6月30日、7月1日……何年ぶりのことだろう。

最大時16万人の避難者。死者44人を出した世界最悪レベルの大事故となった東京電力福島第1原子力発電所事故。今回の報道は「大津波は予見できたか。事故は防げたか」を争う刑事裁判の初公判の様子を知らせていた。

訴えられているのは、事故当時の東京電力の会長・副会長の3名。3人は「自分たちに責任はない」と無罪を主張している。

素朴な疑問として「では、この大事故の責任は誰？」と思ってしまう。が……今後、長期に及ぶことが予想されるこの裁判の行方を追い、真相を追究しながら、考えていきたい。

それが、私たちが、この実行委員会を立ち上げた初心「被災地を忘れない」を引き継ぐことだから。

<京都新聞 7月1日付より>

<朝日新聞 7月1日付より>

東京電力福島第1原発事故の刑事裁判の争点

指定弁護士	弁護側
子会社が最大15.7mの津波を試算し、具体的な対策を報告。3人は重大性を認識し、事故を予見できた	15.7mの試算の基になった政府の「長期評価」は、信頼性がなく、予見できなかった
防潮堤建設や設備の高台移転などの措置を講じるまで、運転を停止すれば防げた	試算通り防潮堤を設置していても防げなかった。実際の津波は試算を上回る規模だった



福島原発事故強制起訴裁判

東京電力福島第一原発の事故をめぐり、全国の1万人超が東電幹部や政府関係者を業務上過失致死傷などの容疑で東京地検などに告訴・告発した。検察は2013年9月、全員を不起訴処分としたが、市民による東京第五検察審査会は14年7月、勝俣恒久元会長(77)ら東電幹部3人を「起訴相」と議決。東京地検が再び不起訴処分としたが、検審は15年7月、3人を強制的に起訴すべきだと議決。16年2月、検察官役の指定弁護士が3人を業務上過失致死傷の罪で強制起訴した。

「となりの委員さん」 ~実行委員からのメッセージ~

Q 委員会の活動に参加したきっかけは？

震災の時の報道を見て、何かできないかと思っていました。中学に入って今井千和世先生からお誘いを受け、参加を決めました。ひとりでも多くの方々の、心の支えになれたらいいなと思っています。

Q 特に印象に残っている活動は？

クリスマスに東北に物資を送ったあと、お礼状が届いたことを聞いて、お役に立てていることを実感しました。

(高2 - 5 金本さん)



知るために、忘れないために・・・「震災遺構^{いこう}」を訪ねてみませんか

【京都新聞 6月29日付より】 傍線引用者

先週、宮城県南三陸町を訪ねた。東日本大震災の津波で激しい被害を受けた町の防災対策庁舎は補修工事が終わり、被災直後の色に近づくように全体を赤く塗装されていた。

2011年3月11日、鉄骨3階建ての庁舎を襲った津波は高さ12メートルの屋上を越えた。

災害対策にあっていた町職員のうち、アンテナや手すりにつかまった11人は助かったが、43人が犠牲となった。

「見るのがつらい」という遺族の声を受け、一時は解体が決まった。一方、津波の猛威を伝える震災遺構として恒久保存すべきとの意見もあり、震災から20年後の31年3月まで県が維持管理し、時間をかけて議論するという。

京都府は先月、日本海側での大地震発生に伴う被害想定を明らかにした。府北部の死者数は最大で5410人。福井県沖の若狭湾内断層による地震では、津波のため宮津市や舞鶴市の一部で2メートルを超える浸水が発生し、犠牲者は300人と見込む。

府は今後、市町と連携して減災対策に取り組む。数字は一定の目安にはなるが、南三陸町の被災を教訓に、想定を上回る揺れや津波の可能性も考慮して備えに努めてもらいたい。



震災前（2009年12月）の防災対策庁舎



約14メートルの津波に襲われ、町職員43名の方々が犠牲となった庁舎（山村武彦氏撮影）



補修を終えた庁舎（時事通信社撮影）

「〇〇遺構（いこう）」として修復・保存される遺跡が国内に増えています。以下の2つに大別されます。

A 戦争遺構・被爆遺構（空襲や原爆の衝撃に耐え、残ったもの／基地や防空壕のあと）

・・・原爆ドーム・広島市レストハウス・袋町小学校（広島市）浦上天主堂旧鐘楼・城山小学校（長崎市）など

B 災害遺構・震災遺構（火山の噴火による火砕流・土石流・大雨や地震による土砂崩れ・地すべり・洪水・地震の

衝撃・津波など、災害の影響を受けたもの）

・・・旧大野木場小学校・土石流被災家屋保存公園（長崎県島原市）郷村断層（京丹後市）神戸港震災メモリアルパーク（神戸市）阪神淡路大震災にともなう地すべり跡地（宝塚市）野島断層（兵庫県北淡町）

これらは戦争や災害の猛威に耐え、黒こげになったり、あるいは大きく崩れたりしながらも奇跡的に残ったため、修復されて大切に保存・公開されているものです。上の記事にあるように、ご遺族をはじめたくさんの方々の悲しみを含み、痛々しい姿で時間と風雪に耐えながら、戦争や災害の怖さ、破壊のすさまじさと、その場に居た方々の恐怖を訴えかけています。「それでも残されている意味」を私たちはしっかり受けとめる義務があると思います。そのためこの夏、東日本委員会メンバーは、阪神淡路大震災で生じた巨大な地割れ、「野島断層」と神戸市の「人と防災未来センター」を訪れる予定です。次号と文化祭でわしくご報告いたします。